大学生の退学意図と サークル集団への所属ならびに偏差値との関連

高　田　治　樹

問題

大学生の退学の現状

大学生の退学は、学生と大学の両者にとって解決すべき課題であり、いずれの大学においても問題視されており、退学の防止策を検討することは大学にとって必須の課題である。大学生の退学と文部科学省(2014)では、大学の中途退学率が 2.65% であった。また、2011 年から 2019 年まで行われていた「大学の実力」調査では、大学生の中途退学率は 7% ～ 10% であった。調査によって退学率にばらつきはあるものの、大学生の退学は大学において問題視されており、中途退学の防止策は大学にとって重要な課題となる。

退学率の増加に伴い、各大学では様々な対策が講じられている(岩崎, 2015、藤原ほか, 2013、窪内, 2009)。先行研究をまとめると、教員による対策、学生相談機関による対策、居場所作り、人間関係づくりなどが挙げられる。しかし、退学防止策の現状を見ると、学生の居場所づくりや人間関係づくりの対策はあまり実施されておらず、学生に対する教員や相談機関による個別対応を重視している。そこで、本研究では、居場所や人間関係づくりに基づく退学対策としてのサークル集団の活用を検討することを目的とした。

大学生のサークル集団

サークル集団は、大学生の自主的な意思に基づいて結成され、主たる構成員が大学生であり、加入も運営も大学生の自発的意思決定に基づいた集団である(新井・松井, 2003)。サークル集団は、企業組織と比較して、構成員同士の地位関係が不明確であり(新井・松井, 2003)、組織から離脱することのコストが低く(尾関・吉田, 2007)、所属期間が最長 4 年であり大幅に短いという特徴を有している。さらに、サークル、部活動、クラブ、同好会、愛好会など多様な名称が混在し(新井・松井, 2003)、集団ごとに組織の活動目標が多様であり(三隅, 2001)、組織の性質にばらつきが大きい(新井・松井, 2003)。そのため、フォーマル集団とインフォーマル集団の双方の性質を持つセミ・フォーマル集団として扱われている。

サークル集団での活動は、大学生の大学生活への適応を促すことが様々な研究により示されている。多くの大学生は、友人関係を求めてサークル集団に入団しており(江刺, 1993；川端, 1998)、サークル集団への所属は大学での人間関係の広がりに繋がる(宮下, 1995)。サークル集団に所属することで友人関係が構築され、サークル集団を大学生活での居場所(大木・大月, 2012；

大島・浜島・岩田・竹内, 2003）や、大学生活における心理的支え（新井・松井, 2003）として捉えるようになる。また、サークル集団に所属する大学生は、サークル集団での活動に不参加だった大学生やサークル集団を退団した大学生よりも、大学生活の充実感や満足感が高かった（荒井・曾根・山口・迫, 1998；橋爪・高木, 1995；大島他, 2003）。したがって、サークル集団への所属は友人関係の構築により、学生の大学生活の居場所となり、大学生活への適応を促すことが推察される。

以上のことから、サークル集団に所属することで大学での居場所が見つかり、退学の予防につながると考えられる。鍛冶（2009）は、退学に関連する要因としてサークルへの所属経験が卒業を予測していたことを明らかにし、サークル活動への奨励の重要性を指摘している。しかし、鍛冶（2009）の研究では、サークル集団に所属経験があることをダミー変数としており、サークル集団に所属する学生、サークル集団を退団した学生、サークル集団に所属していない学生の区別をしていない。サークル集団を退団した学生は、サークル集団を辞めた後に、大学での居場所が喪失されると考えられるため、退学には所属し続けることが重要であると考えられる。したがって、サークル集団への所属状況を所属、退団、未所属の３つの群に分割する必要があると考えられる。そのため、本研究では、サークル集団の所属状況の違いと退学意図との関連を検討する。

大学への帰属意識と退学意図

本研究では、退学意図に影響を及ぼす要因として大学への帰属意識を取り上げる。従来、帰属意識は、組織コミットメントとして研究されてきた。組織コミットメントは、企業組織の離職を予測する重要な変数として扱われ、組織コミットメントは類似した概念だけでも 25 以上の概念があり、研究者により様々に定義されてきた（Meyer & Allen, 1987；Morrow, 1983）。近年では、Meyer ら（Allen & Meyer, 1990；Meyer & Allen, 1987；Meyer, Allen & Smith, 1993）による組織コミットメントの捉え方が注目されてきた。Meyer& Allen（1987）は、組織コミットメントが単一の類型ではなく、３つの要素により構成されるとした３次元組織コミットメントモデルを提唱した。Meyer ら（Allen & Meyer, 1990；Meyer et al., 1993）は、組織コミットメントを“成員が組織にその後も継続するかどうかの判断基準を提供するような成員と組織との関係性を表す心理的状態”と定義し、組織コミットメントを多次元で捉える尺度を開発した。Allen & Meyer（1990）による尺度は、情緒的愛着により所属しようとする“情緒的コミットメント”と、功利的な利益のために所属しようとする“継続的コミットメント”、所属しなければならないという義務や忠義の意識により所属しようとする“規範的コミットメント”の３因子により構成された。

組織コミットメントは、企業組織だけではなく、様々な組織において援用されている（橋本他, 2010；野寺・中村, 2011）。大学に対する帰属意識として、中村・松田・薊（2016）は組織コミットメントや大学帰属意識などの先行研究を参考に、４つの下位尺度からなる尺度を作成している。具体的には、第１因子は、組織コミットメントの情緒的コミットメントの内容に対応する「愛着」因子であり、第２因子は、組織コミットメントの規範的コミットメントの内容に対応する「同一化」因子であり、第３因子は、組織コミットメントでは見られない大学の社会的評価の高さを表す「社会的評価」因子、第４因子は、組織コミットメントの継続的コミットメントに対応すると考えら

れる「規範的・世間体」因子である。中村他(2016)では、帰属意識の各下位尺度と大学満足ならび不適応との相関係数を算出しており、その結果、帰属意識が高いほど、大学に満足し、大学に適応していることを明らかにしている。

Meyer et al. (2002)や大里(2008)による組織コミットメントのメタ分析の結果から、組織コミットメントが離職と関連していることからも、帰属意識は退学意図と予測すると考えられる。ただし、サークル集団への所属と大学への帰属意識との関連を明らかにした研究は見られない。

学部の偏差値帯による影響

退学と関連する要因には様々な要因が挙げられるが、その要因として学部の偏差値があげられる。たとえば、清水(2014, 2021)は、社会科学系学部において、偏差値が低い大学ほど、退学率が高いことを明らかにしている。また、中島(2014)は、文系・理工系の学部を対象として分析を行い、偏差値が高いほど退学率が低いことを明らかにしている。これらは入会儀礼効果の影響であると考えられる(Aronson & Mills, 1959)。入会儀礼効果とは、入会時に厳しい審査を受けた方が集団に対して好意的な印象を抱きやすいという効果である。一方、ベネッセ(2014)による調査においては、退学意図は偏差値帯があがるほど低くなるが、全体的な傾向としては弱いことを示唆している。以上のように学部の偏差値と退学率との関連は一貫した結果が得られていない。

また、サークル集団は自発的な意志決定に基づく集団であり(新井・松井, 2003)、社会人基礎力が醸成されることが示唆されている(向居, 2013)。つまり、サークル集団は自発的な学生が多いほど、活性化すると考えられる。一方、塩谷(2019)において、偏差値が高いほど、ソーシャルスキルが高いことも明らかにされているなど、偏差値が低い学部の学生では、社会的な交流が乏しくなり、サークルが活性化しないと考えられる。つまり、サークル集団の所属の有無と学部の偏差値帯との関連が考えられるが、関連を検討した研究は見当たらない。

目的

以上の議論を踏まえ、本研究では、大学生の退学を防ぐ対策としてサークル集団の活用が有効であるかを明らかするために、サークル集団の所属の有無と退学意図との関連を検討する。また、退学意図と関連する変数として大学への帰属意識と大学の偏差値に焦点を当て、サークル集団への所属との相互関連性も検討する。

なお、退学意図に加えて、学生の状況を表す変数として、出席率と取得単位数を取り上げる。船戸(2008)は、退学防止対策について「退学願」が出てからでは遅く、「欠席が多くなる」「成績が低下する」などの兆候をできる限り早くつかむことが重要であるということを述べている。したがって、退学意図に併せて、学生の出席率ならびに取得単位数を取り上げる。

方法

調査手続き・調査対象者

2020 年 3 月に株式会社マクロミルに Web 調査を依頼した。調査の冒頭では、研究倫理に関わる説明として、回答が無記名で行われること、回答することによって不利益が生じないこと、回答が統計的に処理され個人が特定されないことを示し、研究倫理に関する説明に同意される場合には「同意する」を選択し、以降の質問に回答するように求めた。調査への同意が得られた回答者 6,881 名に対して、「大学名」ならびに「学部名」を記入してもらい、大学の偏差値について回答してもらった。具体的には、「あなたが入学試験を受験した際、あなたの所属する大学の偏差値はおおよそどの程度でしたか？以下にあてはまる選択肢より回答してください。」と教示し、「39 以下」（254 名）、「40~49」（1,096 名）、「50~59」（2,533 名）、「60 以上」（1,359 名）、「わからない」（1,639 名）の 5 つの選択肢より偏差値を選択するように求めた。その後、大学名が不明もしくは無効回答であった回答者ならびに、偏差値が不明であった回答者を除外し、後続の調査を実施した。結果、偏差値 39 以下の回答者 137 名（以下、偏差値低群；平均年齢 = 19.72, *SD* = 0.89）、偏差値 40 ～ 49 の回答者 206 名（以下；偏差値中低群、平均年齢 = 19.51, *SD* = 0.86）、偏差値 50 ～ 59 の回答者 276 名（以下、偏差値中高群；平均年齢 = 19.26, *SD* = 0.89）、偏差値 60 以上の回答者 206 名（以下、偏差値高群；平均年齢 = 19.15, *SD* = 0.74）から回答が得られた。

調査項目

サークル集団への所属　サークル集団への所属状況について、「所属している」、「所属していたが退団した」、「所属していない」の選択肢より選択するように求めた。

大学への帰属意識　大学への帰属意識を測定するために、中村・松田・薊（2013）大学への帰属意識尺度を用いた。「愛着」（α =.93, ω =.94）「誇り」（α =.85, ω =.85）「社会的評価」（α =.82, ω=.82）「規範意識」（α =.74, ω=.74）の 4 つの下位尺度より構成される 20 項目について 5 件法で回答を求めた。

退学意図　大学からの退学意図を測定するために、独自作成した項目に回答するよう求めた。具体的には、「あなたは、現在、大学に対してどのように考えていますか？最もよく当てはまるものを 1 つだけ選んでください。あまり考え込まずに思うとおりに回答してください」と教示し、「大学を辞めたい」、「別の大学に入り直したい」、「大学にいる時間が無駄だ」の 3 項目について「あてはまらない」～「あてはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

出席率　大学への出席率について「あなたは現在、大学の講義に平均して、どの程度出席していますか。様々な講義があると思いますが、あなたの直感でお答えください。なお、0 から 10 の整数でお答えください。」と教示し、数値による回答を求めた。

取得単位数　大学での取得単位について、「あなたは現在、大学の単位をどれくらい取得していますか。なお、正確に分からない方もおおよその単位数でお答えください。」と教示し、数値による回答を求めた。

なお、取得単位数は、学年によって異なることから、取得単位数を学年で除し、平均取得単位数を算出した。

なお、その他にも調査項目を設定したが、本研究の目的にそぐわないため、本研究の分析では用いなかった。

結果

尺度構成

まず、退学意図尺度の因子構造を検討するために、主成分分析を実施した。その結果、尺度の一次元性が確認され（Table1）、信頼性係数も許容される数値（$\alpha = .80$, $\omega = .80$）であったため、以降の分析では項目の平均得点を尺度得点として用いた。

Table 1　退学意図尺度の主成分分析

	主成分負荷量	共通性	独自性
大学を辞めたい	.871	.758	.242
別の大学に入り直したい	.817	.667	.333
大学にいる時間が無駄だ	.848	.718	.282
負荷量平方和	2.144		
因子寄与率	.715		
α	.797		
ω	.797		

また、大学への帰属意識尺度の確証的因子分析を実施した結果、CFI = .871, TLI = .850, RMSEA = .099[.095, .104], SRMR = .063 であり、十分な適合度指標は得られなかったが、原著に依拠し、各尺度の平均値を尺度得点として算出した。

以上の退学意図尺度ならびに帰属意識尺度の下位尺度、出席率と平均取得単位数の記述統計ならびに相関行列を Table2 に示した。

Table 2　使用変数の記述統計ならびに相関行列（上三角 相関係数、下三角 *p* 値）

	Mean	*SD*	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
① 退学意図尺度	2.00	1.05	—	−.570	−.400	−.370	−.120	−.200	−.100
② 愛着	3.11	1.01	.000	—	.780	.650	.270	.150	.040
③ 誇り	2.87	0.92	.000	.000	—	.570	.330	.180	.070
④ 社会的評価	3.03	1.11	.000	.000	.000	—	.290	.140	.040
⑤ 規範意識	3.41	0.95	.000	.000	.000	.000	—	.000	.000
⑥ 出席率	8.90	1.71	.000	.000	.000	.000	.950	—	.160
⑦ 平均取得単位数	22.29	9.43	.000	.210	.050	.240	.900	.000	—

サークル集団への所属と大学の偏差値との関連

サークル集団への所属と大学の偏差値との関連を検討するために、度数分布を算出し、χ^2 乗検定を実施した（Table3）。その結果、$\chi^2_{(6)} = 59.06$, $p = .000$, Cramer's V = .189 であった。有意な連関が見られたため、標準化済み残差を算出した結果、偏差値低群と偏差値中低群は、所

属が少なく、未所属が多い一方で、偏差値高群と偏差値中高群では、未所属が少なく、所属が多かった。

Table 3　サークル集団への所属と大学の偏差値との関連

	度数			割合			標準化残差		
	所属	退団	未所属	所属	退団	未所属	所属	退団	未所属
偏差値低群	56	22	59	40.9%	16.1%	43.1%	−4.80	1.18	4.38
偏差値中低群	99	26	81	48.1%	12.6%	39.3%	−3.78	−0.17	4.28
偏差値中高群	186	35	55	67.4%	12.7%	19.9%	3.37	−0.17	−3.56
偏差値高群	148	24	34	71.8%	11.7%	16.5%	4.24	−0.65	−4.16

サークル集団への所属と偏差値による尺度得点の差

サークル集団への所属と大学の偏差値が尺度得点の違いに及ぼす影響を検討するために分散分析を実施した。結果を Table4 に示す。

まず、サークル集団への所属は、退学意図と帰属意識の下位尺度のうち「愛着」「誇り」「社会的評価」への主効果が見られた（$Fs = 6.05$~11.14, $ps = .000$~$.003$）。多重比較の結果、所属群は、退団群と未所属群よりも、それぞれの得点が有意に高かった。

Table 4　尺度得点の分散分析結果

			退学意図		愛着		誇り		社会的評価		規範意識	
		n	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*
所属	偏差値高群	148	1.75	0.88	3.57	0.86	3.23	0.85	3.92	0.83	3.67	0.85
	偏差値中高群	186	1.80	0.99	3.33	0.96	3.01	0.86	3.22	0.92	3.46	0.92
	偏差値中低群	99	2.14	1.08	2.96	0.91	2.88	0.82	2.63	0.99	3.37	0.95
	偏差値低群	56	1.90	0.90	2.96	0.94	2.69	0.97	2.48	1.03	3.20	1.03
退団	偏差値高群	24	1.79	0.97	3.48	1.06	3.14	1.04	3.63	1.07	3.34	1.01
	偏差値中高群	35	2.47	1.22	2.95	0.99	2.90	0.78	3.08	1.20	3.64	0.80
	偏差値中低群	26	2.51	1.33	2.73	1.12	2.46	1.00	2.47	0.92	3.23	1.02
	偏差値低群	22	2.80	1.01	2.38	1.09	2.25	1.02	2.00	0.85	3.17	1.06
未所属	偏差値高群	34	1.97	0.87	2.94	1.07	2.87	1.00	3.61	0.96	3.54	0.98
	偏差値中高群	55	2.08	1.11	2.99	1.07	2.70	0.98	3.02	1.02	3.38	1.10
	偏差値中低群	81	1.94	1.05	2.93	0.95	2.66	0.87	2.51	1.02	3.29	0.85
	偏差値低群	59	2.44	1.20	2.54	0.94	2.37	0.79	2.12	0.96	3.07	1.02
サークル所属主効果	*F*		10.23		11.14		9.41		6.05		0.92	
	p		.000***		.000***		.000***		.003**		.401*n.s.*	
	η^2		.024		.025		.022		.012		.002	
偏差値主効果	*F*		5.60		11.50		11.51		57.81		4.35	
	p		.001***		.000***		.000***		.000***		.005**	
	η^2		.019		.039		.040		.173		.016	
交互作用効果	*F*		2.63		1.72		0.67		0.38		0.62	
	p		.016*		.115*n.s.*		.671*n.s.*		.894*n.s.*		.711*n.s.*	
	η^2		.018		.012		.005		.002		.005	
多重比較			退団>未所属>所属 高群>低群, 中低群		所属>退団, 未所属 高群>低群, 中低群		所属>退団, 未所属 高群>低群, 中低群		所属>退団, 未所属 高群>中高群>中低群>低群		高群, 中高群>低群	

次に、大学の偏差値は、退学意図と帰属意識の４つの下位尺度すべてで主効果が見られた（$Fs = 4.35$~57.81, $ps = .000$~$.016$）。退学意図、愛着、誇りでは、偏差値高群が、偏差値低群と偏差値中低群よりも得点が有意に高かった。社会的評価は、偏差値高群、偏差値中高群、偏差値中低群、偏差値低群の順に有意な差が見られた。規範意識は、偏差値高群と偏差値中高群が、偏差値低群よりも有意に得点が高かった。特に、社会的評価では偏差値による強い効果が見られた（$\eta^2 = .173$）

サークル集団への所属と偏差値による交互作用は、退学意図においてのみ見られた。偏差値中低群では、所属群が未所属群と退団群よりも退学意図が低かった。偏差値中低群では、未所属群が退団群よりも退学意図が低かった。偏差値中高群では、所属群が退団群よりも退学意図が低かった。また、所属群では、偏差値中低群が、偏差値高群と偏差値中高群よりも退学意図が高かった。未所属群では、偏差値高群が他の群よりも退学意図が低かった。退団群では、偏差値低群が偏差値中低群よりも退学意図が低かった。

サークル集団への所属と偏差値が退学意図に及ぼす影響

サークル集団への所属と偏差値が退学意図に及ぼす影響を検討するために、重回帰分析を実施した。重回帰分析では、独立変数に帰属意識の４つの下位尺度、大学の偏差値帯、サークル集団の所属の有無を投入し、従属変数には、退学意図、出席率、平均取得単位を投入した。なお、大学の偏差値帯は順序尺度と見なし、偏差値低群から偏差値高群まで１点～４点となるように数値変換した。また、サークル集団への所属の有無は、「所属群」を１、「未所属群」と「退団群」を０と数値変換し、ダミー変数とした。

重回帰分析の結果を Table5 に示す。分析の結果、出席率には、「誇り」から正の標準化偏回帰係数が見られ（$\beta = .166, p = .003$）、「規範意識」から負の標準化偏回帰係数が見られた（$\beta = -.074, p = .045$）。

また、平均取得単位には、サークル集団の所属から正の標準化偏回帰係数が見られた（$\beta = .117$, $p = .001$）。さらに、退学意図には、「愛着」から負の標準化変化域係数が（$\beta = -.652$, $p = .000$）、「誇り」から正の標準化偏回帰係数が見られた（$\beta = .102$, $p = .028$）。

Table 5　重回帰分析の結果

	出席率		平均取得単位		退学意図	
	β	p	β	p	β	p
愛着	−.006	.920	−.032	.600	−.652	.000***
誇り	.166	.003**	.082	.147	.102	.028*
社会的評価	.049	.338	−.035	.496	.004	.926
規範意識	−.074	.045*	−.024	.511	.028	.365
偏差値帯	.043	.288	.064	.115	−.006	.851
サークル集団の所属	.013	.721	.117	.001**	−.041	.173
R^2	.040	.000	.023	.004	.335	.000

注）*$p < .05$, **$p < .01$, ***$p < .001$

考察

本研究では、退学対策としてサークル集団の活用の検討を目的として調査を実施した。以下では、サークル集団の所属による影響を中心として考察する。

まず、サークル集団への所属と学部の偏差値との関連を検討した結果、学部の偏差値とサークル集団への所属との関連が見られた。具体的には学部の偏差値が高いほどサークル集団に所属する割合が多く、学部の偏差値が低いほどサークル集団に未所属の割合が多かった。この理由としては､大学においてサークル活動が活発に行われているかということが挙げられると考えられる。先述のように、塩谷(2009)では、偏差値が低い学部の学生ではソーシャル・スキルが低いことが明らかにされている。つまり、偏差値帯が低い学部の学生は対人関係の構築が難しく、サークル集団に所属することに苦慮する可能性が考えられる。そのために、サークル集団への所属と学部の偏差値との間に関連が見られたものと考えられる。

次に、サークル集団への所属と学部の偏差値が退学意図と帰属意識に及ぼす影響を検討するために、分散分析を実施した。その結果、サークル集団に所属する学生ほど「愛着」と「誇り」という帰属意識が高かった。サークル集団は、複数の大学の大学生に所属するサークルであるインカレサークルなどを除き、大学内で公認されている組織が大半である。つまり、サークル集団での活動は大学での活動の一部である。そのため、サークル集団に所属することが大学への帰属意識を高めたと考えられる。

また、サークル集団を退団した学生ほど「退学意図」が高かった。サークル集団を退団することは今までの人間関係を崩壊させる危険性がある。特に、所属していたサークル集団だけにしか居場所や人間関係がなかった学生にしてみると、サークル集団を退団することで、居場所がなくなり、友人も減ると考えられる。そのため、退団した学生の退学意図が高かったと推察される。

一方、大学の偏差値と帰属意識との関連では、偏差値が高い学部に所属する学生は、偏差値が低い学部に所属する学生よりも帰属意識が高いことが明らかになった。本研究の結果は清水(2014, 2021)や中島(2014)の結果と整合する結果である。偏差値が高い学部に所属する学生で帰属意識が高い理由としては、入会儀礼効果(Aronson & Mills)による影響であると考えられる。つまり、偏差値が高い学部では、入学前の受験勉強に多くの努力を要し、入学条件が厳しい。そのため、偏差値が高い学部に所属する学生は、多くの努力に対する評価と釣り合うように、大学に対する評価を高めたと考えられる。

最後に、サークル集団への所属と学部の偏差値、帰属意識が退学意図、出席率、平均取得単位に及ぼす影響を検討するために重回帰分析を実施した。その結果、帰属意識の「愛着」は退学意図を抑制していた。この結果は、従来の先行研究と整合する結果であった。組織コミットメントは離職意図と正の関連をしており(Meyer et al., 2002；大里, 2008)、大学への帰属意識も大学の満足度と関連していた(中村他, 2013)。情緒的コミットメントなどの組織に対する愛着は、組織を居場所と考え情緒的な繋がりを表す帰属意識である。つまり、大学を自身の居場所と考えていたために、退学意図が抑制されていたと考えられる。

また、「誇り」は退学意図と出席率を促進していた。「誇り」は、組織と自分を同一化するコミットメントである。つまり、大学に対して積極的に関わろうとする態度である（高田・松井, 2012）。したがって、「誇り」が出席率を高めていたと考えられる。一方で、「誇り」は退学意図を高めていた。高田・松井（2015）は、サークル集団に対する組織コミットメントについて検討しており、サークル集団に対して否定的な評価をしているにも関わらず、関わっているという「集団への妥協」という態度を導出している。「集団への妥協」は、集団に対して積極的に関わろうとする「集団への責務」と近接して付置していた。つまり、「集団への妥協」と「集団への責務」は、集団への関与という点で共通する要素が見出されている。つまり、集団に積極的に関わるとすることで、ポジティブな側面だけではなく、ネガティブな側面にも触れる機会が増えると考えられる。そのために、「誇り」の高さが退学意図を予測していたと考えられる。

最後に、サークル集団への所属は平均取得単位数を高めていた。サークル集団に所属することは社会人基礎力を高めることが明らかにされている（向居, 2013）。つまり、サークル集団での活動を通して、計画を立て、練習をし、実行するという行動の醸成に繋がると考えられる。そのような行動は単位取得という課題においても有効であると予測される。つまり、単位をとるためにはどのような計画をたて、授業に出席し、試験に対策するスキルを育てたと考えられる。また、サークル集団では、様々な人間関係が構築されることで、授業に関する様々な情報を入手することが可能になると考えられる。つまり、単位取得をするための情報の入手もしやすいと考えられる。以上のことから、サークル集団への所属が平均取得単位数の増加を予測していたと推察される。

本研究の結果から、サークル集団への所属が退学を予防対策として有効である可能性が示唆された。つまり、サークル集団への所属を大学として奨励することで居場所づくりや人間関係の構築によって人間関係を形成し、退学を予防することができると考えられる。ただし、サークル集団への所属割合は学部の偏差値によって異なることが示された。つまり、偏差値が高い学部では、サークル集団への所属を奨励することのみでサークル集団への所属が可能となると考えられる。一方で、偏差値が低い学部では、サークル活動が活発ではない可能性があり、サークルに所属する機会も乏しいと考えられる。そのため、学生がサークル活動に積極的に参加できる仕組みを大学として提供し、サークル活動の援助をすることで、学生のサークル活動への参加を促すことが必要となると考えられる。

本研究の限界としては、以下の２点が挙げられる。第一に、本研究ではサークルの所属の有無のみに着目して、退学意図との関連を検討した。しかし、高田・松井（2014）での明らかにされたように、サークル集団に所属するだけではなく、サークル集団とどのように関わるかということが、大学生活への満足感や充実感に影響を及ぼすと考えられる。そのため、今後はサークル集団への態度を含めて、退学意図との関連を検討する必要がある。

第二に、本研究では偏差値を学生が認識する学部の偏差値として扱った。しかし、偏差値は予備校によって算出される数値であり、予備校によって偏差値に相違がみられる。そのため、学部の偏差値と同一の予備校の偏差値を用いるなどして、客観的な指標を用いる必要がある。

謝辞

本研究は 2019 年度佐藤弘毅記念研究助成金（目白大学）により実施された。研究の実施にあたり、小浜駿先生（宇都宮共和大学）ならびに菊地学先生（岩手県立大学）に多大なる協力を頂いた。両名に感謝の意を表す。

引用文献

新井洋輔・松井　豊(2003). 大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向. 筑波大学心理学紀要, **26**, 95-105.

新井洋輔(2004). サークル集団における対先輩行動：集団フォーマル性の概念を中心に. 社会心理学研究, **20**, 35-47.

荒井貞光・曾根幹子・山口光明・迫　俊道(1998). 大学生のクラブ・サークルの教育的・社会的効果の研究(1) ―社会人と学生の意識の比較から―. 日本体育学会第 42 回大会号, 172.

江刺正吾(1993). 女子学生と課外活動. 大学と学生, **335**, 11-20.

藤原朝洋・富永ちはる・押味京子(2013)「大学における休退学の現状・対策・課題の検討―37 大学の現状と取組―」. 九州共立大学『九州共立 大学研究紀要』, 第 **4** 巻第 **1** 号, p.14, 17.

橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年(2010). 大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル―準組織集団の観点からの検討―. 実験社会心理学研究, **50**, 76-88.

橋爪裕子・高木　修(1995). クラブ・サークルへの加入から離脱までの意思決定過程の研究. 日本社会心理学会第 36 回大会, 86-87.

岩崎保道（2015）大学における休・退学防止の検討：学内組織連携型の学生支援策に注目して. 関西大学高等教育研究(**6**), 81-86

鍛冶　致(2009). 新設大学における退学・休学・留年 -- 多変量解析による要因分析. 研究紀要 **7**(**1**), 153-163.

川端雅人（1998). お茶の水女子大学生の課外活動に関する研究―運動クラブについて―. お茶の水女子大学　人文科学紀要, **51**, 187-202.

窪内節子(2009)「大学退学とその防止に繋がる これからの新入生への学生相談的アプローチの あり方」. 山梨英和大学『山梨英和大学紀要』, **8**, p.10.

Meyer, J. P., & Allen, N. J. (1987). Organizational commitment: Toward a three-component model, Research Bulletin, 660, *The University of Western Ontario, Department of Psychology*, London.

Meyer, J. P., Allen, N. J., & Smith, C. A. (1993). Commitment to organizations and occupations: Extension and test of a three-component conceptualization, *Journal of Applied Psychology*, **75**, 538-551.

Meyer, J. P., & Allen, N. J. (1997). Commitment in the workplace: Theory, research, and application, Thousand Oaksm CA.

Meyer, J. P., Allen, N. J., & Smith, C. A. (1993). Commitment to organizations and occupations: Extension and test of a three-component conceptualization, *Journal of Applied Psychology*, **75**, 538-551.

三隅二不二(2001). リーダーシップ行動の科学　改訂版. 有斐閣

宮下一博(1995). 青年期の同世代関係. 落合良行・楠見孝（編). 講座生涯発達心理学 4　自己への問い直し―青年期―. 金子書房, 155-184.

向居　暁(2013). 大学生の正課外活動と社会人基礎力―幼児・児童教育関連学部卒業生において―. 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, 246.

中島弘至（2014). 偏差値による大学変数の分析：文系・理工系, 国公立・私立の観点から. 東京大学大学院教育学研究科紀要 **54**, 201-210.

中村 真・松田英子・薊理津子(2016). 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響（3）帰属意識に基づいて分類した大学生のタイプと大学不適応との関連. 江戸川大学紀要（**26**), 23-31.

野寺　綾・中村信次(2011). 向大学態度尺度開発の試み. 日本福祉大学子ども発達学論集, **3**, 71-80.

大木貴子・大月　友(2012). 部活動における成功経験の有無と心理的対処能力および適応との関係. 人間科学研究, **25**, 144.

大島真夫・浜島幸司・岩田弘三・武内　清(2003). キャンパスライフの研究―サークル、恋愛、アルバイトを中心に―. 日本教育社会学会大会発表要旨集録, **55**, 102-107.

大里大助(2008). わが国における組織コミットメント研究の現状―メタ分析による検討―. 福岡女学院大学紀要, **9**, 1-14.

尾関美喜・吉田俊和(2007). 集団内における迷惑行為生起及び認知―組織風土・集団アイデンティティによる検討―. 実験社会心理学研究, **47**, 26-38.

清水　一(2013). 大学の偏差値と退学率・就職率に関する予備的分析：社会科学系学部のケース. 大阪経大論集, **64**(**1**), 57-70.

清水　一(2021). 大学生の退学要因の考察：社会科学系学部のケース. 大阪経大論集, **71**(**5**), 1-13.

塩谷芳也(2019). 大学生のソーシャルスキルに対する出身階層と学生生活の効果. 京都産業大学論集. 人文科学系列, (**52**), 143-155

高田治樹(2014). 大学生サークル集団への態度の探索的検討：―否定的態度を含めた態度パターンの分類―. 青年心理学研究, **26**(**1**), 29-46.

高田治樹・松井　豊(2012). 大学生のサークル集団に関する研究動向：新井・松井(2003)からの研究動向の変化. 筑波大学心理学研究 -(**43**), 25-35.

（たかだ　はるき／社会心理学）